

八女南部圃場整備事業地内 埋蔵文化財予備調査概報

八女市文化財調査報告書

第 7 集

1982

八女市教育委員会



序

八女市は古代遺跡の宝庫といわれています。

ただ、その分布は北部に連なる八女丘陵上に数多く存在し、調査についても八女丘陵上の古墳、窯跡等に重点がおかれ、平野部については十分な調査が今日までなされていませんでした。

このたび、八女の南西に位置する八幡校区と三河校区の一部に県営圃場整備事業が推進される事となり、平野部である該当地域の予備調査をすすめたわけであります。

調査は、国県の補助を得て県教育委員会及び地元の方々などのご指導とご協力を得て実施し、所期の目的を果たすことができました。

ここに調査結果をまとめた報告書を刊行するはこびに至りましたが、本書の執筆にあたっていただいた県教育委員会の調査員の方々のご熱意に心から敬意を表します。

昭和57年3月31日

八女市教育委員会

教育長(職務代行者) 松崎 友衛

例　　言

1. 本書は圓場整備事業に伴う事前調査として実施された八女市南部地区の予備調査概報である。
2. 予備調査は、昭和56年度国庫補助事業として八女市教育委員会が事業主体となり、福岡県教育委員会の協力を得て実施した。
3. 遺構の実測は井上裕弘・副島邦弘・田中博文が、遺物の実測は副島と平田春美氏、製図は豊福弥生氏の協力を得た。遺構写真は井上・副島が、遺物写真は平島美代子氏の協力を得た。なお、遺物整理にあたっては福岡県教育委員会岩瀬正信氏の協力を得た。
4. 本書の執筆は第4地点を副島が、他は井上が行い、編集は井上があたった。

本文目次

1.はじめに	1
2.第1地点の概要	1
3.第2地点の概要	2
4.第3地点の概要	3
5.第4地点の概要	4
6.第5地点の概要	15
7.第6地点の概要	15
8.第7地点の概要	15
9.第8地点の概要	16
10.第9地点の概要	16
11.おわりに	17



第1図 調査地点位置図 (1/20,000)

1. はじめに

この調査は八女南部地区県営圃場整備事業に伴う事前の予備調査として実施されたものである。昭和55年6月県農政部農地整備課より県教育委員会文化課あてに、当地区的文化財の有無について文書による協議がなされた。これを受けた文化課では早速、分布調査のため現地におもむいた。現地はすでに稲の作付中で、その内容把握が困難であったため、地形をもとに判断した。従って、地区内の微高地に文化財が所在する可能性があるため、試掘調査が必要である旨回答した。しかし、実施時期が1年間延期されたため、56年5月、再度県農政部農地整備課及び八女南部地区圃場整備事業推進委員会より、文化財調査についての調査ならびに協力依頼がなされた。それを受けた再び県教委文化課調査第一係長宮小路賀宏、同技師伊崎俊秋が現地を訪れ、切り盛り計画上削平される可能性の高い10地点についての文化財の所在と深度を知るため、試掘調査を行うことを県農政部・市教委・推進委員会に申し入れた。そして試掘後再度、資料をもとに協議することとなった。

試掘調査は、八女市が国・県の補助を受け昭和56年9月24日～10月17日の間で実施した。調査関係者は次のとおりである。

調査主体	八女市教育委員会	教育長	今村 久信
"		社会教育課 課長	松延 繁太
"		〃 係長	山口 龍一
"		〃 事務史員	伊藤 周二
"		〃 "	田中 博文
調査担当	福岡県教育委員会	管理部文化課主任技師	副島 邦弘

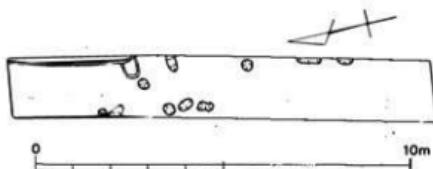
この他に、市農地整備課・八女南部地区圃場整備推進委員会の御協力を得た。また、発掘作業に従事していただいた地元の方々、並びに整理作業にあたっては九州歴史資料館の方々の御協力を得た。記して謝意を表します。

2. 第1地点の概要

調査対象地点は、緒玉集落西側に形成された標高25mの低位段丘上2.875m²で緒玉73番地にあたる。当該地は茶畠と野菜作付けのため西側の一部に11m×1.5mのトレンチを設定するだけにとどめた。

(1) 遺構

検出された遺構は、北側隅から竪穴住居跡と思われる遺構と奈良時代のものと思われるピット群が検出されたのみである。遺構面までの深度は73cmである。



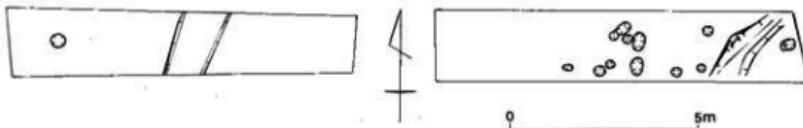
第2図 第1地点トレンチ実測図(1/150)

(2) 遺物

古墳時代後期の土師器甕・高杯、須恵器甕と、奈良時代の土師器杯・高台付椀、須恵器高台付椀等の破片資料が多数出土した。

3. 第2地点の概要

調査対象地点は、第1地点西側の標高24mの低位段丘上6.875m²で、現在畠・果樹園となっている。試掘はその内の国武276-1番地に9m×2mと10m×2mのトレンチをほぼ東西に設定した。また、遺跡のひろがりを確認するため274番地に6.5m×1mのトレンチ1本を設定した。前者を2-1地点、後者を2-2地点と呼称する。

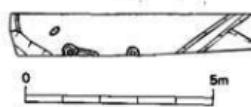


第3図 第2-1地点トレンチ実測図(1/150)

(1) 遺構

2-1地点から検出された遺構は平安時代の溝2条と多数のピット群である。2つの溝はほぼ並走するもので、東側の溝は、幅0.8m、深さ0.45mの断面U字状を呈するものであった。西側の溝は、幅1.2m、深さ10cmの断面V字形を呈していた。溝底は北から南に傾斜していた。

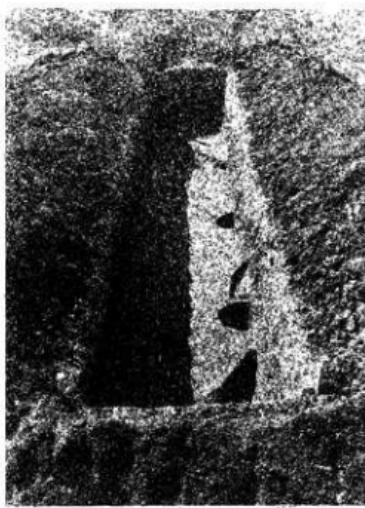
2-2地点から検出された遺構は、溝2条と竪穴1基、ピットが3個である。ピットは柱穴



第4図 第2-2地点トレンチ実測図(1/150)



第5図 第2-1地点全景



第6図 第2-2地点全景

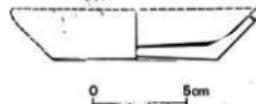
を思わせる二段掘りのものである。南側の溝は幅40cm、深さ20cmで断面U字状を呈す。

遺構面までの深度は、2-1地点で52cm、2-2地点で39cmを測る。

(2) 遺 物 (第7図)

2-1 地点の西側の溝中からは平安時代の土師器皿・杯、須恵器甕等の破片が多数出土した。第7図の土師器杯は底径 9 cm を測る。底面の切り離しはヘラ切りで、一部板目状圧痕を残す。他に土師器皿・杯・高台付椀、須恵器甕等の破片が多数出土した。

2-2 地点からは平安時代から鎌倉時代のものと思われる土師器皿・杯・土鍋等の破片資料が若干出土した。



第7図 第2-1地点出土土器実測図(1/3)

4. 第3地点の概要

調査対象地点は国武集落南側に近接する標高25m、4.625m²の段丘上である。試掘地点は国武147番地の畠地で、畠中央部 5 m × 1 m のトレンチ 3 本を南北に設定した。

(1) 遺構

検出された遺構は、北端トレンチの南隅から中世（？）と思われる河原石集積壙が検出された他は、ピット群のみである。遺構面までの深度は114~125cmと深かった。

(2) 遺物

奈良時代の須恵器高台付碗・甕、平安～鎌倉時代のものと思われる土師器皿・杯・土鍋等の破片資料多数が出土した。



第8図 第3地点全景



第9図 第3地点北端トレンチ全景

5. 第4地点の概要

調査対象地点は第2地点西側の標高23.5mの低位段丘上8,500m²で、現在畠地・ミカン園・苗木園となっている。試掘はまず、国武96-2番地の畠地の一部に1.5m×15mのトレンチを設定したところ繩文時代早期の押型文土器・石器多数が検出されたため、その拡がりを把握する必要があり、急提、193番地の水田と106-2番地の畠地も試掘することとなった。それぞれ4-1,

4-2, 4-3地点と呼称する。なお、第4-3地点は4グリットに細分した。

(1) 遺構

第4地点では1地点から3地点まで柱穴と溝状遺構を捉えることができた。その中でも、1地点は繩文早期末の押型文土器の単純層とその基盤面を捉えることができたことが最大の成果で、第4地点全域に2地点を中心とする平安時代末から中世初頭の遺物を検出した。この微高地は南側が繩文早期の遺構面で西側の2地点は歴史時代の平安時代末から中世初期頃の遺構の存在が推定されるわけで重複された遺跡である。

では各地点の遺構について若干の説明を付加する。

1地点（第10図）

東西方向に $1.5m \times 15m$ のトレンチを設定した。東側に溝2本を検出した。

溝1は押型文土器の基盤層を切り込んで掘られており、断面U字形を呈している。

溝2は断面U字形を呈し、東端では南側に立上がり溝が広がるものと考えられる。

遺物は集中して黒褐色上層に石組と押型文土器を多量に出土した。礎や作業台として使用された石皿状のものや、挙大の円盤で磨石・砥石として使用された石器や河原石等に混じって、黒曜石の石器（石鏃）・剝片、原石の破片またチャート原石とチャート剝片を検出した。この層が繩文時代早期末の生活面である。

この生活面の拡がりを求めることが必要である。しかし、この様な果樹園や畠地を形成している微高地まで圃場整備事業区域に入れること自体疑問である。

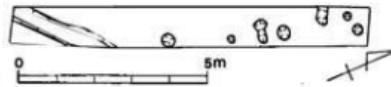


第10図 第4-1地点トレンチ実測図(1/150)

2地点（第11図）

1地点よりも約100m北西側の畑に $1m \times 10m$ のトレンチを設定した。

平安末から中世初頭の溝と柱穴等を検出した。遺物には内黒土師器や灯明皿と思われる土師器類が出土している。この溝の覆土からは若干の押型文土器が出土している。



第11図 第4-2地点トレンチ実測図(1/150)



第12図 第4-1地点全景



第13図 第4-1地点遺物出土状態

3地点 (第17図)

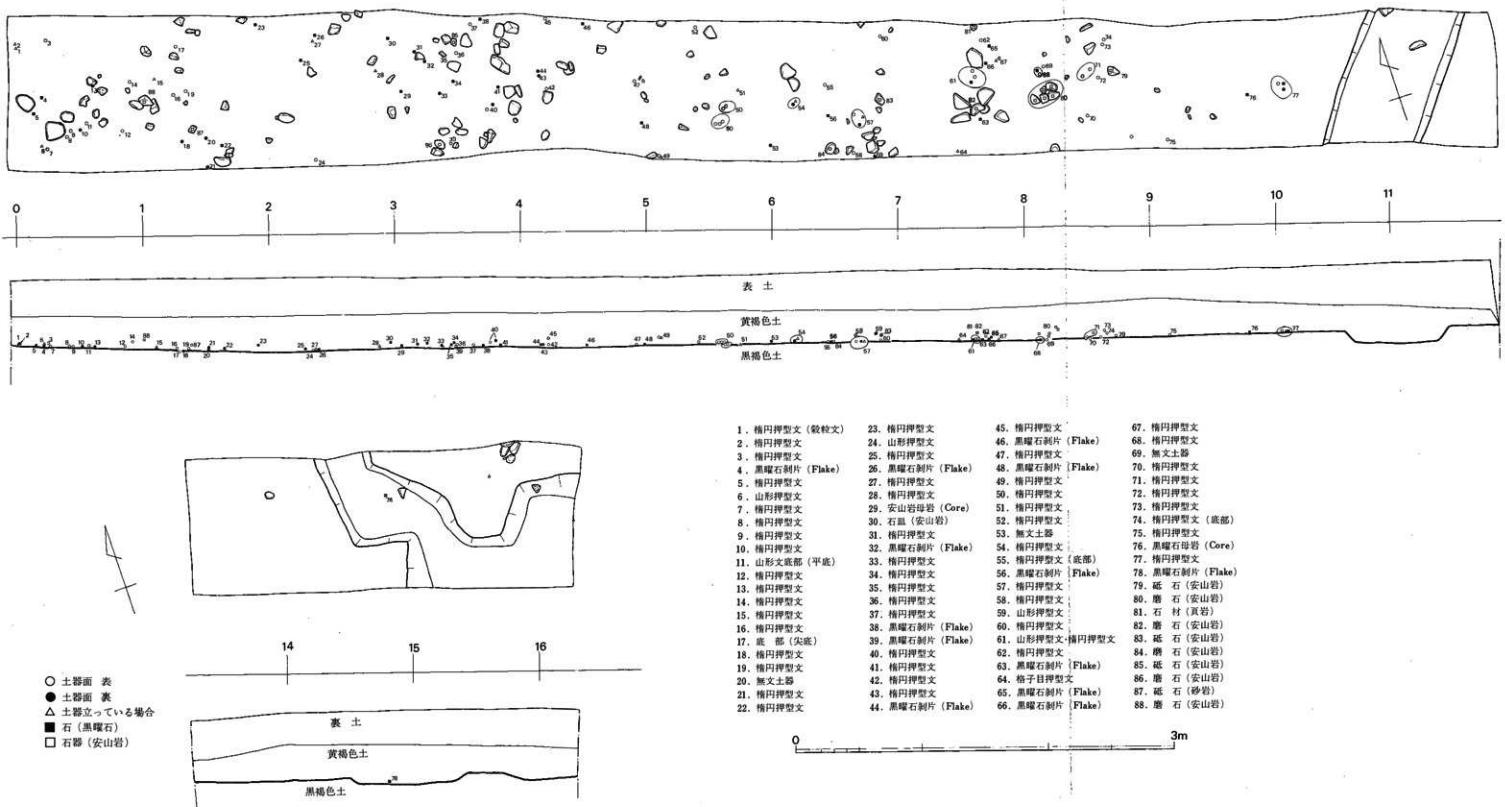
1地点の南東側にある。微高地を地下水げして、水田につくりかえたことを地権者から聽取した。



第14図 第4-2地点全景



第15図 第4-3地点全景



第 16 図 第 4 - 1 地 点 遺 物 出 土 状 態

1.5×28mのトレンチを設定しその内を5m間隔で約15mを調査することとなった。地層の堆積は北側が高く、南に行くほど低くなっている。だらだらと落ちて小川へと至っている。この中に、それぞれのポケットを1G～4Gのグリット番号を付した。

1Gから押型文の時期の溝状遺構を捉えた。層位は耕作土厚さは15cmその下に水田の床面が5cmの厚さでその下層はパラスが50cmあって、黒色土（黒膜層）がありこの中から多くの押型文土器が出土している。この黒色土こそが縄文早期の層として捉えてよいであろう。



10m

(2) 遺 物

1 地点 (第18～20図)

土器は、縄文早期の押型文土器で、文様分類すると楕円・山形・格子目その他に撚糸文土器が検出されている。石器は石組に使用された河原石の中に磨石・石皿・砥石として使用されたものや、黒曜石の原石・剥片そして石鎌等が検出されている。またチャート製の剥片と原石も出土している。これらのこととは他の押型文土器を出土する遺跡においても一般的なことである。



石鎌は鉤形（第20図1）と抉りの浅い逆ハート形（第20図2）の鎌である。また他は砥石（第20図6）と磨石あるいは叩石として使用されたもので（第20図3・4）、側縁中央部に手で握りやすくするための抉りを入れている。重量は400～700gの間で500g前後が多い。

押型文土器は1地点・3地点で検出されたものを合わせて最後にまとめたい。

2 地点 (第21図)

溝の付近から土師器の皿・小皿と内黒土師器等が出土している。石器は砂岩の砥石が1点出土した。



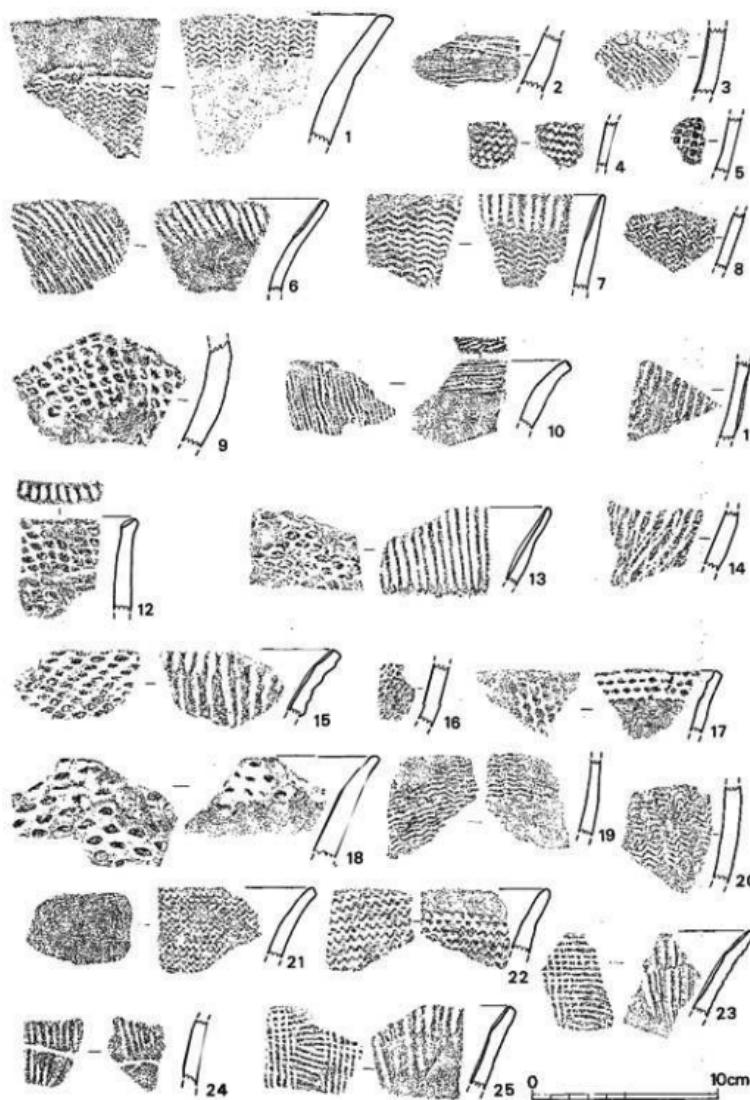
①は内黒土師器で、口径12.8cmで胎土は精良な粘土で金雲母を含み、内面は黒色でヨコ方向にミガキをかけている。口縁部は若干玉縁状にまるまっている。外面の調整はナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈する。②は高台の部分で黒褐色土から出土しているので、調整はナデ仕上げで高台は貼付高台である。色調は内外面とも黄褐色を呈している。③は中央部を2次的に穿孔している土師器の皿で径が15.1cm、器高は1.9cmで、調整は底部が手持のヘラ削りで他は内外ともナデ仕上げである。色調は黒っぽい緑灰色を呈して、胎土に細粒砂を含み精良なる粘土を使用し、焼成は良好である。



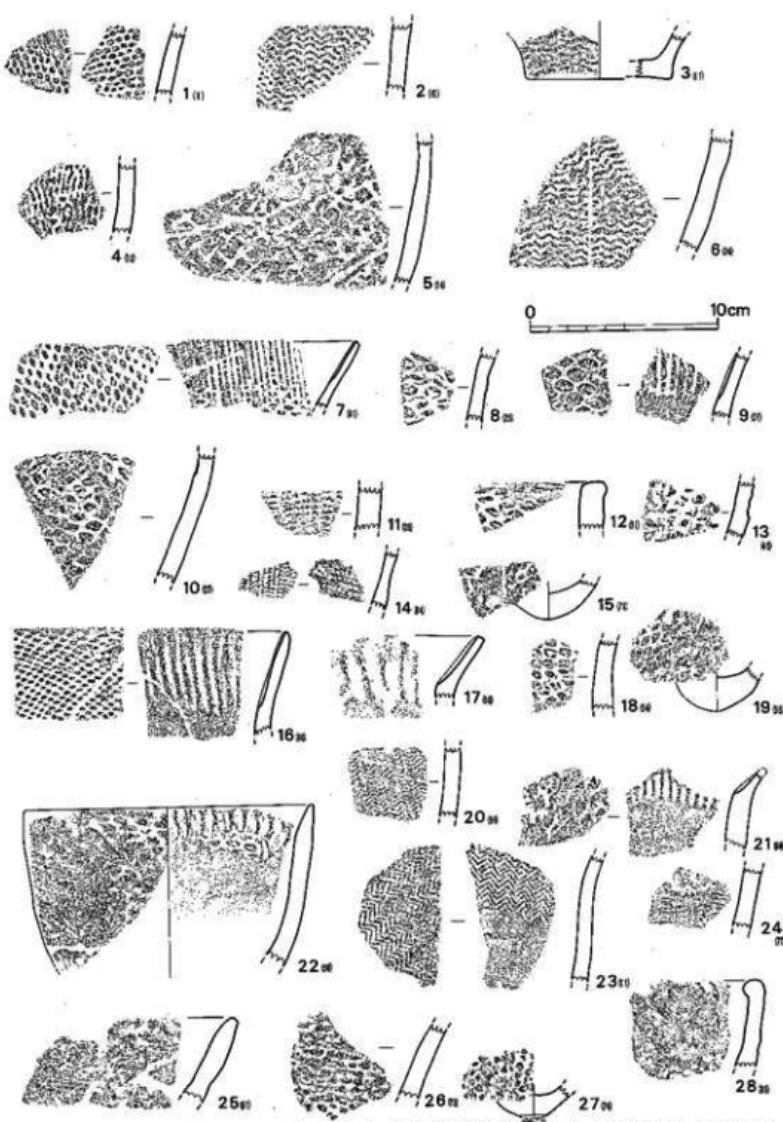
時期的には平安末頃の所産である。

3 地点 (第22図)

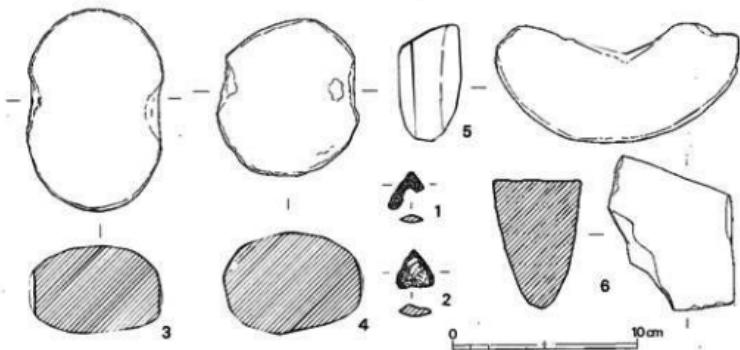
第17図 第4-3地点トレンチ実測図 (1/150)



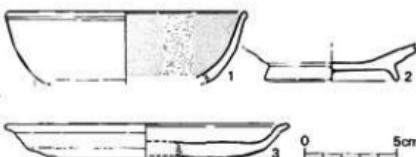
第18図 第4-1地点出土土器実測図①(1/3)



第19図 第4-1地点出土土器実測図②(1/3) ()の小字は累記図ドットの遺物番号



第20図 第4-1地点出土石器実測図(1/3)



第21図 第4-2地点出土土器実測図(1/3)

遺構は溝状造構で、黒色土から押型文土器が出土した。他に黒曜石の剝片が若干検出されている。

まとめる意味で1地点・3地点の押型文土器を若干述べることとした。

第4地点の1地点・3地点から出土した土器片の総数は339点で、その内分は表1の通りである。

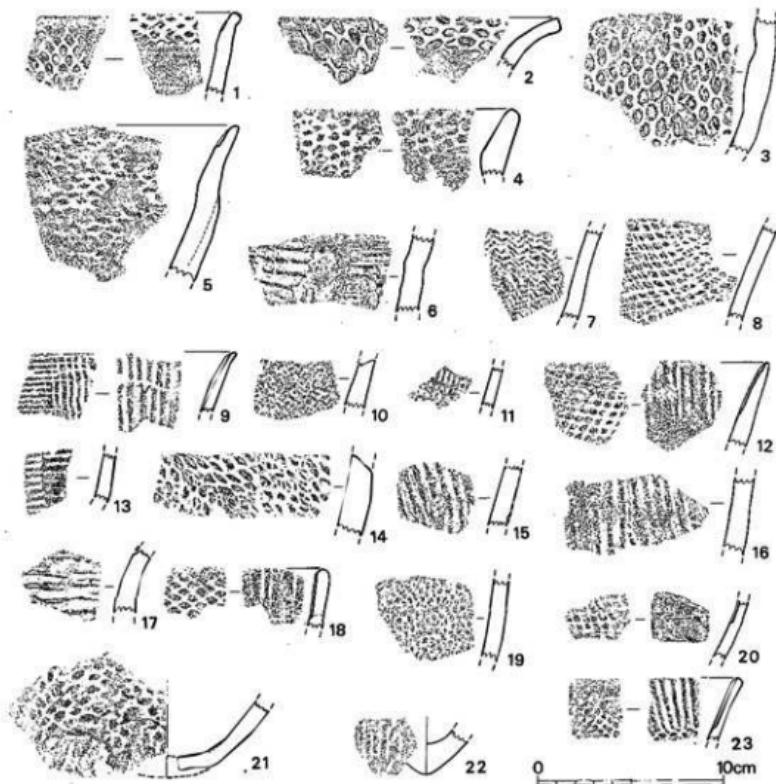
これを百分率で表示すると次の様になる。

(文様)	(%)		
押型文土器 楕円	88.1%	撚糸文土器	0.88%
山形	6.6%	条痕文土器	3.1%
格子目	0.3%	その他(無文土器含む)	1%

この縄文関係の遺物の分類をこころみることにした。これらの土器は、文様・器形・施文技法などを基にして4群に大別し、それぞれを細別することとした。しかしながら、その基本には第16図の折り込みに示す遺物の原位置が中心となり、その事象が根底となる。

I群は押型文土器、II群は条痕文土器、III群は撚糸文土器、IV群は無文土器で、と大別した。

I群 押型文土器



第22図 第4-3地点出土土器実測図(1/3)

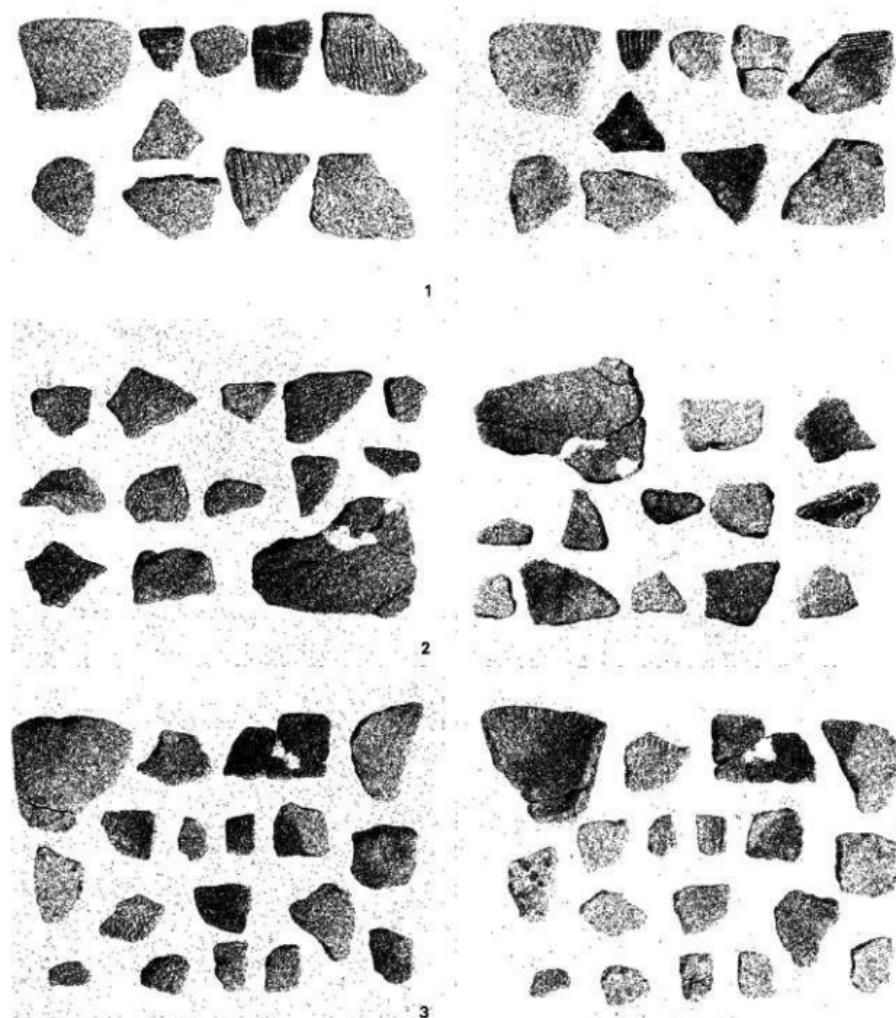
押型文土器の总数は327点で、96%以上を占めている。その内分は楕円押型文が89%で山形押型文は7%、格子目押型文は1%未満であった。

第23図は押型文土器の底部で、山形押型文が平底以外は、他は尖底を呈するものと、尖底に近い丸底を呈するものがある。

押型文土器の胎土に、一部には、纖維を含むものもある。一般的に雲母片を含んだものが多い。器面内側にはいわゆる原体条痕を縱位方向に施しているものや、横位方向に原体を施文しているものもある。原体条痕は第22図9の様に原体を施文した後に原体条痕を入



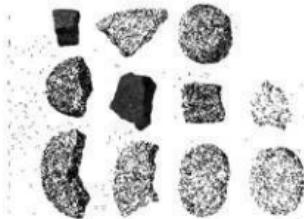
第23図
押型文土器の底部



第24図 第4地点出土押型文土器① (外表面 (外側面))



第26図 石錐及び剝片類



第27図 磨石・砥石

れていますため、廻転した押型文が残り、縦位方向に条痕を引いたため、押型文の一部が残っています。

押型文土器の内面調整は押型文原体でナデ仕上げしているため、原体の一部と思われるものが観察された。押型文土器の内面調整については詳細なる観察が必要であるが、器壁がもろいためと剥離が多く、残りが悪いため、注意されずにいたが、今後このことは注意を喚起するものである。

当該地の押型文土器の器形は大まかに2つに分類できる。

1. 口縁部が直口ないしは内弯ぎみに立上がるるもの。
2. 口縁部が大きく外反し、口縁上端部近くで外反させ、尖底ないし乳房状に近い底部をもつもの。

に分類できるが、前者は外面のみの施文が、内面には端正な沈線文と外面と同一原体を用いた施文が見られ、後者は内面に斜行する沈線文及び原体条痕ないしは、沈線文と山形・楕円文等を施文した土器で、前者よりも器面をデコレイトをする文様は粗大化する傾向である。当遺跡ではその大半は後者である。

のことから時期は縄文早期末の田村式に該当するが、その文様の百分率で、あまりにも楕円文が多いということは、今迄の発掘所見とは他の文様の土器と押型文土器の比率が半々なののが普通であるが、当遺跡の特長ともいえる。

II群 条痕文土器

当遺跡では11点出土し、その中で①第18図6の様な条痕・②第18図9の沈線文に近いものと、③第18図17の様な条痕に分類できる。

①・②は原体条痕をもって施文しているもので、粘土が生乾きのうちに施文したものである。

③は斜行の条痕で、原体ではない施文具を使用しているもので、今後に問題を提起するものでいわゆる貝殻腹縁文の条痕とは相違する多くの問題を含んでいる。

III群 撫糸文土器

出土した数は3点で約1%であるが、第18図10の様に口縁部破片で、器面の調整は外面は縦位方向に施文し、内面は横位方向に撫糸原体を施文している。口唇部には撫糸原体を押しつけている。他の2点は同一原体である。

IV群 無文土器

第19図25の様な口縁部破片が代表的なもので、数は2点で1%未満である。

第4地点の1地点と3地点の縄文早期末のあり方は、西・北部九州の押型文土器を検出した遺跡のあり方と相違する。このことは筑後地方の特殊性を表示するものかどうかは今後の調査にかかっている。

このことは前述の様に、あまりにもその組成が相違することに起因する。

6. 第5地点の概要

調査対象地点は第2地点の南側に近接した標高24mの孤立低位段丘上750m²である。本来、第2地点とつづいていた段丘が、水田の開削等で孤立した地区と思われる。試掘地点は、国武175番地の畑地中央に6×1.5mのトレンチ1本を設定した。深度120cmで湧水がみられたため、調査を断念した。出土遺物は何にもなく遺構は存在しないものと思われる。

7. 第6地点の概要

調査対象地点は八幡小学校西側の標高23mの孤立低位段上1.312m²である。試掘地点は平304-6番地の畑地である。調査結果は、近世の墓地数基が検出されたのみである。

8. 第7地点の概要

調査対象地点は第4地点の谷をはさんで南側の八幡小学校の北側標高22.5mの低位段丘上30.687m²で、最も広い地点である。試掘地点は段丘西端部の畑地で、新庄194-2番地である。畑地中

中央に 5×1.5 m のトレンチを 5m の間隔で 3 本設定した。

(1) 遺構

検出された遺構は、北側トレンチから溝 2 条のみである。北側の溝は最大幅 70cm、南側は 25cm を測る。深さは未掘のため不明である。

(2) 遺物

中世の土師器・青磁の小片が若干出土したのみである。

9. 第 8 地点の概要

調査対象地点は、八幡小学校西側の標高 20.8m の低位段丘上 13.250m^2 である。試掘地点は段丘先端部の畑地で、新庄 434-2 番地にあたる。畑地東側に 5.5×1 m のトレンチ 1 本を設定した。

(1) 遺構 (第 28 図)

調査地が段丘先端部ということもあって当初、遺構の存在を期待していなかったが、調査の結果は中世の溝 1 条、柱穴と思われるしっかりした多数のビット群が検出された。溝は最大幅 70cm、深さ 14cm の断面逆台形を呈す。遺構面までの深度は北側で 30cm、南側で 37cm を測る。

(2) 遺物

中世の土師器皿・杯・羽釜・摺鉢片が少量と磨石 2 点が出土した。



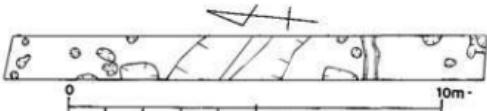
第 28 図
第 8 地点トレンチ実測図(1/150)

10. 第 9 地点の概要

調査対象地点は、下新庄集落の北西、標高 20.5m の低位段丘上 2ヶ所で 5.812m^2 である。現在、畑地・茶畠・果樹園・植木園等となっている。試掘地点は南側段丘上の北東端部で、新庄 1459-1 番地にあたる。調査は $13m \times 1.5m$ のトレンチ 1 本をほぼ南北に設定し実施した。

(1) 遺構 (第 29 図)

検出された遺構は溝 3 条、土壙 2 基と多数の柱穴と思われるビット群である。トレンチ中央



第29図 第9地点トレンチ実測図

から検出された中世の溝は、最大幅2.5m、深さ0.8mの断面V字状を呈す大溝である。中世の集落等の存在が予想される。遺構面までの深度は60~67cmである。

(2) 遺 物

トレンチ中央から検出された大溝内から青磁・土師器皿等の小破片が出土した。他に土師器皿・杯等の小破片が少量出土した。

11. おわりに

今回の試掘地点は9地点で、第10地点については植木柵のため実施できなかった。その結果、遺構・遺物が検出されたのは、第1~4地点、第7~9地点の7カ所である。

縄文時代早期の押型文土器・石器や歴史時代の遺構・遺物が多数検出された第4地点は、その範囲が微高地のほぼ全域に拡がるものと思われる。とりわけ、資料的にまだ少ない押型文土器の発見は貴重であり、出土状態等からしてこの時期の集落の存在が予想される。また、遺構面までの深度が40~50cmと浅いため、事業計画上充分留意しなければならない地点である。

他の地点から検出された遺構・遺物は、全て平安~鎌倉時代に属するもので、他の時代のものは第1地点を除き、殆んど検出されなかった。これは、この低位段丘上に集中的に人間が住みはじめた時期を示すものであろう。この時期に、この地域一帯の水田開発がなされたことを物語るものかもしれない。南側を近接して流れる矢部川が引き起す、たびかさなる氾濫に、はじめて農民が具体的に対応した結果を示すものと言えないだろうか。

今回の試掘調査は作付中ということもあって全て手掘り作業を行った。遺構面までの深度も深く、渓水等もあり作業は極めて難行した。多大な労力を提供していただいた作業員の皆様に感謝の意を表します。



第30図 発掘風景

八女南部圃場整備事業地内
埋蔵文化財予備調査概報

八女市文化財調査報告書
第7集

昭和57年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647番地

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号